
恋人代行

植田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋人代行

【Nコード】

N9110Y

【作者名】

植田

【あらすじ】

「恋人のフリをしてもらいたい」。ある事がきっかけで社長から恋人代行を頼まれた倅。社長はまとわりつく女性たちを排除したかった。社長はフリを頼んだ相手が、本気の恋に発展しなさそうな相手を探していた。倅はゲームにしか興味がないためうってつけだった。そんな事を言っておきながらも、社長のほうが倅に次第に惹かれていき…。

第一話 きっかけ

「よし、終わった」

仕事を終えた倅は立ち上がり、鞆を手に持った。

「ゲームの続きが出来る」

腕時計を見ると二十時を過ぎたあたりだった。帰宅まで歩いて十分、シャワーを浴びて簡単な夕飯で済ませたとしても二十一時前にはゲームを始められる。くふふとにやけながら、エレベーターに乗り込む。

倅は通勤時間が惜しくて、会社近くの安いアパートで暮らしていた。

みねしまやち

峯島倅三十二歳。ゲームに夢中になり過ぎて恋をする間もなく、気が付けばこの年に。結婚願望のない倅はゲームさえあれば満足だった。いつかは大音量、大画面のテレビでゲームをする事を夢見て、マイホーム資金をせっせと貯金していた。

目標額まで貯金はまだまだ足りないが、ゲームの為に仕事を頑張っていた。

エレベーターが一階へ到着し、扉が開く。早く開いてほしくてうずうずしていた。すり抜けられる程度の隙間ができると、倅は飛び出した。

早歩きで帰れば、十五分はかからない。倅は少しずつ駆け足になっていく。

照明が必要最低限にまで落とされたロビーで、男の後を女が追う姿が見えた。女が男の腕を掴むと、男はその腕を払いのけ、口論が始まる。

——痴話喧嘩か。

関心のない倅は彼らを見向きもせず、ロビーを駆け抜ける。が、突然顔面に衝撃を受けた。

「遅かったじゃないか」
「ほえ」

顔に当たったのは、痴話喧嘩真つ最中の男の体だった。男は倅の肩に手をのせ、耳元で囁いた。

「すまないが、話を合わせてくれ」
「何よ、その女！」

上品なスーツを身に纏い、妖艶なスタイルを持ち合わせた美女がヒステリックに騒ぎ出す。

「俺の恋人だ」
「嘘でしょ？ あなた恋人はいないって言ったじゃない」

——えええ！？

突如修羅場に放り込まれた倅は動揺した。

これを切り抜ける方法が二択しか思い浮かばなかった。
？無視して立ち去る。
？男に協力する。

頭の中がゲーム感覚に陥った。

ゲームだったら絶対に？を選ぶ。その後のイベントが見たくなるから。

けれど面倒なことに巻き込まれるのもちよつとな……。

倅は目を瞑り、考えた。

男は困った様子で倅を見ていた。

その表情を見てしまうと、？を選ぶと後味が悪そうだった。選択肢が決まると、倅は男の頬に顔を寄せた。

「ごめんなさい。思ったより時間が掛かって掛かってしまつて」

男の肩に手を当てて、彼の頬にキスをするふりをした。女に顔を見られたくなかつたので胸に顔を埋めた。

こんな感じでいいのかな？

倅は男の顔をちらりと覗き込む。男は安心した表情を見せ、倅の肩に手をまわす。

「失礼しちゃう！」

その女は頭に血を上らせ、ロビーから消えていった。その姿が見えなくなると男は胸をなでおろし、倅から離れた。

「すまない、助かった。君、名前は？」

——よし、完了。

倅は名乗らず鞆を肩に掛け直して、足早に立ち去った。

「あつ、君！」

「今日はRPGはやめて、恋愛ゲームにしよう」と

とにかく倅は早く帰宅してゲームがしたかった。

「峯島君、ちょっと」

翌日、倅は加藤課長から呼び出された。けれどいつもと様子が違い、通路の方から手招きしている。そして誰も使用していない会議室に通された。

中年太りの加藤課長はハンカチで額の汗を拭っていた。倅は課長の仕草を目で追っていた。

「君は社長と面識があるそうだね」

「……へ？　ありませんけど」

「おかしいな。さつき社長からうちの部署に『メガネを掛けて、一つに髪を束ねた女性が働いているだろう』って電話が来たから君だと思ってしまったよ」

「……私しかないじゃないですか、その格好」

「だろ？　そんな君に、仕事を依頼したいそうだよ」

「仕事、ですか？」

課長は頬に手を当て、倅の耳元で声が漏れないように囁いた。

「社長がもう一度恋人のフリを頼みたい、と」

その言葉で、もやもやしたものがすっきりしてしまった。

昨日の男は社長だったのか！

「お断りします」

踵を返して会議室から立ち去ろうとした瞬間、課長に肩をがっしと掴まれた。

「だめだつ。この話を聞いてしまった以上、君に断る権利は無いんだよ！」

「ど、どういう事ですか？」

「これは極秘なんだ。この件が実行できなかった場合、それに関わった人間はクビになる」

倅は課長の顔をまじまじと見つめた。どうやら課長にふざけている様子はなかった。

「嘘ですよね？ それにこういった内容でしたら、私ではなくても他に適した女性がいますよね」

倅はファッションに無頓着だった。黒髪を一つに結わき、化粧つ気もなければ、安価な眼鏡を掛けていた。

「それが、口の堅さも条件らしくてな……。こんな内容だとは知らず、『彼女はどんな性格だ？』と聞かれたもので、うっかり君の事を先に話してしまったんだよ」

倅の、口の堅さはお墨付きだった。そもそも人の噂話には興味がないからである。但しゲーム関連の情報に関しての口は軽い。

「事情は分からないが、峯島は一度手伝っているんだろう？ 社長

が、出来れば他の人には知られたくないと言っている。俺だって困ってるんだ。峯島く、どうか助けてくれ！ クビになったらカミさんにどやされるだけでは済まされないんだよお」

頼むうく、と肩を揺すられて課長は懇願した。

課長は四十代後半。お子さんは確か、上から高校生・中学生、下はまだ幼稚園児だと聞いたことがある。課長は必死に倅を引きとめるが、倅には何のメリットもなかった。

「うさん臭すぎます。私は断固お断りします。それでは！」

真顔で敬礼し、課長めがけて手をこめかみから離してその場を後にした。

課長の「みねしまあああ」と悲痛の叫びを背中にうけながら。

第二話 呼び出し

通常業務に戻り、テンキーで数字を入力していると内線が掛かってきた。

「はい、経理課です」

受話器を肩にはさみ、右手でペンをとった時だった。

『お前は誰だ』

低く、冷たい声で男は言った。倅は開口一番のこの言葉に苛立った。内線でいきなりこんな事を言う人間が社内にはいたとは。言葉の語尾に力が入る。

「失礼ですがどちら様でしょうか？」

『谷川だ。お前の名前は？』

「峯島です」

知らない名前だなと思いつつも、名乗ってくれたのでこちらも返事をした。

『……貴様、「断った」な』

はっとした。

首だけを動かし、課長の席に視線を送る。

左手に受話器、右手にハンカチを握りしめたまま、ぐったりとデスクに横たわっていた。まるで戦いに敗れた戦士の様に。

それを見て血の気が引いた。

——ま、まさか。

『今すぐ社長室に来い』

豪快に電話を叩き切る音がした。耳が痛かった。

無視しよう、そう思ったけれど課長の姿を見てしまうと、課長にも更に迷惑が掛かる気がした。

こういう時は直接会って断るべきである。

意を決して立ち上がり、フロアを出た所で倅は立ち止った。

——む、社長室になんて行った事が無い。

フロアに戻り、大股でターゲット先へ向かった。

「課長」

「み、峯島」

課長の体がびくと跳ねた。たらりと額から流れる汗をハンカチで拭う。

人に話を聞かれると厄介なので、机の両端に手を置き、課長にずっと近寄った。

課長はハンカチを握りしめ、身構えた。

「社長室はどこですか？」

社長室は最上階だった。

言われたとおりに足を運び、社長室の前に辿り着く。
扉をノックし、声をかけると室内から上品な声で応答があり、扉が開かれる。

「経理部の峯島です。社長にお会いしたいのですが」
「伺っております。どうぞ、お入りください」

扉を開けてくれた女性はとても艶やかで、綺麗な人だった。
他にも目の保養になりそうな美女が数名いた。秘書というものは有能かつ顔で選ばれるのだろうか、などと考えた矢先、倅は自分の服装がなんだか恥ずかしくなった。
秘書室を抜けると奥に社長室の扉が見えた。秘書が優雅な動きでその扉を押し開ける。

「どうぞ」

倅は秘書に会釈をして、社長室に足を踏み入れた。

「失礼します」

倅が部屋に入ると、中にいた秘書は全員席を外した。

「お前が峯島か」

低い声が窓際から聞こえてきた。その瞬間部屋の空気が張り詰めた。声だけで威圧感が凄かった。

昨夜の必死な声とは大違いだった。

課長から、社長の簡単なプロフィールを聞いてきた。社長の名前は谷川友樹^{ともき}三十七歳。エリート大学卒業後、海外の企業で経営学を学んだ後に、親の経営しているこの会社へ入社。数年で社長に、元社長は会長に就任した。

倅は聞いたことはあったが、興味がなかったので記憶から抹消していた。そもそも経営者に関心がなかった。それを課長に言ったら怒られた。

社長はぎしりと黒い革製の椅子を鳴らして立ち上がり、倅を見た。上から下までじつくりと。

「昨日は助かった。礼を言う」

「いいえ、お礼は結構です。……よく、私だと分かりましたね」

「退社時間から絞り出した」

倅は俯いてぽつりと呟いた。

「職権乱用」

「なんだと？」

「いえ何でもありません」

地獄耳め。

倅は社長を改めて観察する。社長は背が高く、体はがっしりしていた。年齢の割に貫録があった。端正な顔立ちで、はたから見れば格好いい部類だろう。だが倅の好みではなかった。

「呼び出したのは他でもない。恋人のフリを頼みたい」

ほらきた。

倅はさっそく戦闘態勢に入った。

第三話 お断りします

「呼び出したのは他でもない。恋人のフリを頼みたい」

「そのお話はお断りしたはずですが」

社長は視線だけで、倅を押し黙らせた。

「峯島、お前は独身だと聞いたが今、彼氏はあるのか？」

——いきなりスルーですか。

「いませ……、います！」

危うく正直に言ってしまう所だった。彼氏がいる事にするのが、断るには一番早い方法だった。

「そうか、いないのか。加藤課長の情報通りだな」

——課長、私の情報をどこまで流してるのよ……。
がつくりと頂垂れた。

「どうして恋人のフリが必要なんですか？」

「俺は正直結婚に興味が無い。何度もそういつているのに近寄ってくる女性が後を絶たない。女に困っているわけではないし、恋人も今は要らないと思っている」

確かに女には困ってはいなさそうだなと倅も思った。

「なるほど。けれど恋人を演じるのなら、秘書の方でも十分なので

はないでしょうか？」

「なんだと？」

不機嫌な感情をすごく表に出してくる男だった。

「あんなに綺麗な女性が身近にいらつしやるなら、あの方々でも十分役割を果たしてくれるのではないかと思います……」

社長は深い溜め息を吐いた。

「他の奴らに頼まないのは、そのまま本気になられても困るからだ。秘書のやつらなんて、玉の輿を狙って香水をぶんぶんさせてるんだぞ？ あわよくばと考えている奴らにこんなこと頼めるか」
「もしも私が協力して、本気になったらどうするんですか」

倅の言葉に、社長は鼻で笑った。

「お前は、ゲームにしか興味がないと聞いている」

——おつしやる通りでございます。

倅は脱力した。

そんな情報まで流しているのか、課長は……。顔を覆わずにはいらなかった。

「それと経営の事を他人に口外しない、秘密を守るやつでないで困るんだ」

「……ああ、それで口の堅い人を探していたんですね。ではプロの方でも頼んで下さい。では！」

倅には『断る』という選択肢以外は考えられなかった。退出する

ために扉に体を向けた。

社長の足は長かった。あっさり捕まり、体を反転させられた。

「何ですか」

「お前は分かっているようだから教えてやろう。これを見る」

ぱつと目の前にA4の紙を広げて見せる。

それには契約書と書かれていた。つらつらと書かれた文章を、瞳だけを動かして読んでいく。

どこにも、断ったらクビとは書かれていなかった。倅はほつとした。

けれど最後のほうに『完璧に演じることが出来た場合、報酬有。金一封・二百万円也。受け渡し方法…一時金として給与に上乘せ』と書かれていた。

「ほつ、報酬!？」

「これはビジネスだ。悪くない話だろう？ さつさとこの書類にサインをしろ」

お金に目が眩んだ。なんて中途半端な金額なんだと思いつつも心が揺れる。マイホームを手に入れるためにはまだまだお金が必要だった。

ポケットから電卓を取り出し、ガチャガチャ鳴らしながら数字をはじき出す。

「はあー……」

倅は首を横に振った。一時金で受け取ると税金が引かれる事に気が付いてしまった。そして恋人のフリを完璧にこなす事自体に無理

がある。恋愛なんて学生の頃にしたきりだ。

「この話は無かったことにして下さい」

「この額じゃ不満だというのか!？」

両腕を掴み、社長は諦めない。倅は逃れるために必死にもがいた。

「違います! 一瞬目が眩みましたけど、私には無理です。美しい、つりあう人を探して下さい……痛っ」

顔に社長の肘があたり、倅の大事な眼鏡が飛んだ。お金を切り詰めて買った安物の眼鏡が。厚みのあるレンズの表面は傷が付きやすかった。

「眼鏡が……」

メガネメガメと絨毯に手を這わせる。あった。

持ち上げると特段傷も無ければ壊れてもいなさそうだった。ふかふかした絨毯のお蔭だった。立ち上がりながら眼鏡を掛けようとしたところに、社長に眼鏡を奪われた。

「ちょっと、何するんですか」

社長が驚いた様子で倅を見ていた。

「？」

「驚いたな」

髪の毛のゴムをぴんと取られ、毛を手で梳かすように頭を撫でられた。

ぞわぞわつとした。

「お前これを見て何とも思わないのか？」

鏡の前に立たされ、倅は目を細めた。

「近眼なので良く見えません」

よくみる！ と顔面を掴まれ、鏡の真ん前に押し出された。

「これが何か？」

普段から見慣れている自分の顔を見ても倅は何とも思わなかった。
はあ、と社長は溜息を漏らす。

「お前に頼みたい。口の堅さも加藤課長のお墨付きだしな」

「いやーです！ 面倒な事に巻き込まれるのは嫌なんです」
「逃げる気か、峯島！」

眼鏡を取り返し、社長室を出て扉を閉めた。

ふう、と息を漏らす。

ふと視線を感じた。秘書の面々が倅を見ていた。

——そうか、このだらしない格好のせいかな。
眼鏡を掛け、身なりを整えてその場を後にした。

第四話 結局手伝う羽目になる

「頼み事をしたいなら、そちらから来て頼むのが筋じゃないでしようか」

社長は諦めが悪かった。

あれからもしつこく内線で依頼され、倅は困った拳句に吐いた言葉だった。平社員が社長にそこまで言ったら、怒ってもう頼みに来ないだろうとたかをくくっていた。

——けど、来ちゃったよこの人……。

仕事を終わらせて下に降りると、社長はロビーで倅を待ち伏せしていた。その姿を見て倅は目を覆う。課長が倅の退社時間を報告したのだろう。

社長は人気ひとけのない方へと倅を引っ張り、腰に手を当て、胸を張った。

「来てやったぞ」

「ごめんなさい。許して下さい」

倅は静かに頭を下げた。ちろりと社長の顔を見る。

「俺が直接来て頼んでいるんだ。約束だ。一度やってくれてるんだからいいじゃないか。一度や二度も同じだろう。頼む」

「勘弁してえ！」

手首をがっしりと掴まれ、振りほどくことができなかった。倅は腰を下げて必死に抵抗した。

「その後はもう近づかない。約束する。な？」

社長は倅の顔を覗き込んだ。諦めの悪さに倅はとうとう観念した。

「……じゃあ、一度だけですよ？」

「へえ」

その声の方向を見ると以前ここで出くわした女性が腕を組んで立っていた。呆れ顔で倅の体を眺めていた。

イライラが絶好調なのだろう。顎と指先がリズムを取っていた。

「彼の方が彼女にぞっこんなのね。そんなにいいわけ？ その女の体が」

「「えっ？」」

倅と社長は硬直した。

「あんた、見た目はダサイクセに体で横取りしたのね。見てなさいよ」

ふんと女性は力任せに地を蹴って消えていった。

「な、何か勘違いしてませんでしたか？」
「だな」

——だな、じゃないわよ。
倅は社長を睨みつけた。

「この際、フリなんかじゃなくて、きちんと相手の方に断つたらどうですか？」

「何べんもその気はないと言っている。見ていてわからなかったか？ あいつらは俺の話を聞こうとしない。だからこの作戦を思いついたんだ。あいつらと違うタイプの女性と付き合えば諦めてくれるだろうと思ってな」

「まあ、たしかにタイプは違いますよね」

倅は私服を見渡した。ラフなシャツにジーンズ姿だった。

「なるべく迷惑は掛けないように守ってやるから安心しろ。それとできれば髪の毛と眼鏡、何とかしておいてくれ。それと服装はオフイス系で頼む」

——あなたは●ーコですか。ピー●のファッションチェックですか？

心がぐっさりと傷つき、倅は貧血を起こしかけた。

嫌々ながらも髪の毛は束ねず、家にあった使い捨てコンタクトを付ける。

倅は自覚はしていたが、同性からはつきりと『ダサイ』と言われ、少なからずシヨックではあった。更に社長からの駄目出しで傷口に塩を塗られた気分だった。

ラフな格好はやめて、スーツを着崩した感じで出社した。こつち系はてんで弱かった。

社内ではイメチェンですか？と聞かれまくったので気分転換だとかまかした。

倅は内線が鳴る度にワンコールで出る勇気が無くなっていた。電話から視線を外しつつも三回目で渋々取る。

「倅か？ 今すぐ来い」

案の定、社長からだった。

——いきなり呼び捨てで呼び出しですか……。

机に手を掛けて、重たい腰を上げた。

昨日の今日だから契約でもさせられるのだろうか、とぼとぼと社長室に向かった。秘書に通してもらって部屋の扉を開けてもらうと、高齡の男女が立っていた。二人は倅をまじまじと見ていた。恐る恐る部屋に入る。男性は明らかに会長だった。社内報やパンフレットでよく見かける顔だった。

「失礼しま……す」

「倅、おいで」

社長が弾ける笑顔を見せ、手を伸ばしてきた。ぞくりとした。この男も笑うのかと驚きつつも状況が全くつかめない。

どうしていいのかわからず、とりあえず社長の傍に寄ると腕を引っ張られた。

「紹介するよ、こちらが交際相手の峯島倅さん。こっちは俺の両親だ」

——ええ！？ いきなりフリ開始ですか！？

うっかり条件反射で対応する。

「初めまして、峯島倅と申します。よろしく願いします」

腕を振りほどこいて会釈した。が、すぐに手を取られ、握られる。その手は社長の背中に引き寄せられたので、肩がこつんと社長に触れた。握られ慣れてないから手がむずむずした。

「本当に付き合ってるのか？」

突然社長の指が手のひらをくすぐり、倅の指を優しく絡め取る。ぞくつとして、倅は思わず顔が熱くなり俯いてしまった。

「その反応からして、本当のようね。疑って悪かったわ」

「だからそう言ってるだろ」

両親は渋々納得した様子だった。

「わかった。あちらの令嬢にはこちらから断りの連絡を入れておくから」

「そうしてくれると助かる」

社長の両親が部屋を出る間に、社長が倅の耳元に息を吹きかけた。倅はぞわつとして軽く悲鳴を上げた。

倅は小声で「止めてってば」と社長を肩で小突いた。

その声を聞いた両親は、見ていられないといった様子で肩をすくめ、立ち去った。

扉が閉じられたと同時に、社長は手を離した。ふっと笑って机に体重を掛ける。倅は耳を手で覆った。

「上々だな」

「いきなりフリで呼び出すなんて……」

社長はストーカー女だけでなく、両親から持ち込まれる見合い話も一掃させるために倅を利用しようとしていた。

「もちろんそれなりの報酬は渡すと言っただろ。周りが落ち着いたら、別れたと伝えるから安心しろ」

社長が倅に近づき、真顔で鼻先に指を当てた。

「だがなフリといっても、全力で演じろ？　これはビジネスだ。絶対に嘘だと悟られるな。分かったな」

「はい」

背中を仰け反らせて倅は返事をした。社長は頬を掴んだ。

「なんだその嫌そうな顔は」

「いへ。べちゅに」

「報酬で好きなだけゲームでも買え」

その言葉を聞いた倅が、間を置いた後、徐々になやけだす。

「お前、本当にゲームが好きなんだな。報告書通りだな。頑張りようによっては、グッズとか手に入れて来てやるつか？」

「えっ」

倅は目を輝かせた。

「分かり易いなお前。知り合いがいるからツテでもらってきてやる。早速だが契約書にサインしろ」

書面で逃げられない様にする手段はさすがだなと倅は感心した。倅はソファーに腰掛けて、契約書にサインをした。

「そういえば課長は私の事、どういう風に報告を上げてるのでしょうか」

社長は机に向き直り、書類を見直す。

「峯島倅三十二歳。一人暮らし。彼氏無し。彼氏がいたかどうか不明。それくらい付き合い無し。趣味はゲーム。ゲームに関しての会話は熱い。ゲームソフト発売日に残業を頼むのは難しい。恋愛に興味が無い。着飾る金があるならゲームを買う。干物女。

欲しいものはお金。そのお金の使い道はゲームを大音量で楽しむ為のマイホーム資金。ローンは組まずに一括購入希望。現在マンションが一戸建てのどちらにするか迷っている様子」

「はっ……」

課長の洞察力に驚愕した。言葉が何も出なかった。

「まずは少し自分磨きをしろ。職場でもその格好でいろよ。今日みたいにいっ呼び出すか分からないからな」

倅の不得意分野だった。というより、マイホームの為の貯金に手を出したくなかったというのが本音でもあった。同じ使うならゲームを買った方がまだ良かった。

「何黙ってるんだよ」

社長は空気を読み、財布から何かを取り出して倅の胸元にそれを押し付けた。

「金か？ だったらこれを使え。俺はもう行かないといけないから、じゃあな」

それを手で受け取るとそれはゴールドのクレジットカードだった。倅ははっとした。

「ま、待ってください社長！」

倅が腕を伸ばして引きとめるのを無視し、社長は鞆を掴んで颯爽と立ち去った。倅はその場に崩れ落ち、両手に納めたゴールドカードを見つめ、呟いた。

「待ってって言ったのに。クレジットカード、名義人しか使えないんですけど……」

第五話 打ち合わせ

「峯島か、定時後に夕食を取りながら打ち合わせを行う。帰るなよ？」

有無を言わずに電話を切られ、倅は後悔する。やはり請け負わなければ良かったと。

「はあ、ゲームが出来ない」

がつくりと肩を落としながら、待ち合わせ場所に向かう。会社の外にタクシーが横付けされていた。社長が呼んだタクシーなのだろうか。少し離れたところで立っていると、後から来た社長に背中を押され、乗れと促された。

そのタクシーに乗り込み、着いた先はフランス料理の店だった。倅は青ざめる。

「こんな高そうなところで食事だなんて」
「奢ってやる。安心しろ」

その言葉を聞き、倅の足は動き出した。

案内された席に対面で腰掛ける。テーブルには白いクロスが掛けられ、その中央に置かれた一輪挿しに生花が飾られていた。

メニューを見てもピンと来なかったので、社長に任せた。社長はメニューも見ずに何かのコースを二人分頼んでいた。

「まずはこちらをお返しします」

倅は理由を述べてクレジットカードを返した。

「そうか、では費用が発生した時は領収書を俺によこせ。その分は全額現金で払ってやる」

「わかりました」

社長はワインを味わいながら、倅の服装をチェックした。

倅は無難にパンツスーツにブラウスを着用していた。視線だけでチェックされているのは倅にも理解できた。

「できればスカートを履いてくれ」

「ええー。社長って女性の足が好きなんですか。うわっ、飛ばさないで」

倅の一言で、社長は飲もうとしていたワインを口から吹きこぼした。

「好みなんていいだろ別に。お前はスカートのほうが似合うと思うたからだ！」

「そーでしたか」

社長は倅に言い当てられ、動揺した。そうだと素直に言えなかったのは、やや批判気味に言われたせいもあった。気を取り直して社長は本題に入る。

「早速だがフリをするために、余所余所しさをなくしてもらおう。その為に二人にいるときは名前で呼べ。分かったな？」

「……はい、谷川さん」

「苗字じゃない、名前だ！」
「はひっ」

倅は背筋が伸びた。二人きりでもこの威圧感を何とかしてもらいたかった。

「それと、携帯電話の番号を教えろ。連絡先が内線だけだと不便だ」
「はい。じゃあ番号を言いますね。090」

倅は暗記している自分の番号を言い出した。

「ちよつと待て、赤外線通信があるだろ」
「……赤外線？」

倅はきょとんとしていた。

「赤外線、分らないのか？ お前のほうが携帯を使いこなしていそつなの……。携帯を貸してみろ」

倅が鞆から携帯電話を取り出すと、それを社長は掴み取る。二つ折りの携帯を開き、待ち受け画面を見て固まった。

「な、んだ？ これは何の絵だ？」

「ああ、それは今私がやっているゲームの待ち受け画像ですよっ」

チカチカしたイラストを見て、社長は『引いて』しまった。

これが倅の好きなゲームなのか。何のゲームなのか想像すらできなかった。

軽く頭を振ってから、社長は慣れた手つきで赤外線通信の画面を表示させ、アドレス交換を完了させた。

倅は携帯電話を受け取り、鞆に収めた。

「そつえば、あんなに綺麗な女性と、どこで知り合っんですか？」
「彼女たちは取引先や別会社の社長令嬢が殆どだ。両親が勝手に仕組んだ見合い話が原因だ」
「そうだったんですね」

確かに見た目も良くて、肩書が社長だったら伴侶としては申し分無い相手なのだろう。だけどこんなにもピリピリした男のどこが良いのだろうか。

倅は眉根を寄せて社長を見ていた。

「ところであの女性はいつ出沒するんですか？」
「あいつらは神出鬼没だ。自宅や会社の前で待っていたりする。最近は引越したから自宅に来ることは無くなったが。何度か婚約者ヅラをして、社長室までのこのこ足を運んできた時は本当に参った。今は警備員と秘書に事情を話してあるから、社長室までは来なくなっただけ」

警備員は十九時で上がってしまう。だからその時間あたりから口ビ―をうるついていたのか。

「そこで、倅には一緒に帰宅したり、こうして何度か食事を付き合ってもらいたい」

「食事ですか」

「次回からは別会社の社長たちが接待でよく使う店に通う。直接会って断っているにも関わらず、娘共々諦めない人間が数名いるんだ。そんな彼らに俺の恋人の存在を見せつけければ諦めもつくのだ」

「なるほど……」

「だから親しげな雰囲気作りに気を配れよ！？」

「はい」

できるだけ短期間でこの茶番劇を終わらせたかった。ああもしよつちゅう金切り声で結婚を迫られては、疲れが増すばかり。これではようやく邪魔な存在が排除できる。

倅という好都合な女性が見つかり社長は安堵していた。突然呼び出してもすぐに合流できるし、同じ会社というだけで交際理由にもなる。

社長は煽るようにワインを飲み干した。

倅は目の前に運ばれた料理を見つめ、一口食べた。それからその味を確かめるように何度も食べて味わっていた。

いつもこんなに美味しいものを社長は食べているなんて。エンゲル係数、高すぎ。ああ、だけど本当に美味しい。幸せすぎる。つい倅の顔は緩む。

今日の打ち合わせ内容によっては、この仕事を断ろうかと倅は思い悩んでいた。食事をすすめながら倅は再び考える。

毎回ご馳走してもらえるとすると、その日の夕食代が浮く。いいかもしれない。

すぐに頭を振った。夕食代といっても自炊している為、浮いてもせいぜい一食数百円程度だった。あまり意味がないではないか。更に倅は右手のナイフを皿に戻し、額に手を当てた。

——肝心な事を忘れていた。ゲームをプレイする時間を削られることのほうが何よりも大きい事に。

今度は大事なことを思い出し、倅は顔を上げる。報酬の事を失念していた。報酬がもらえたら諦めていたゲームが入手できるではな

いか。右手の指を折りはじめる。購入を断念したものや、発売予定で諦めていたゲームソフトを思い返す。

やはり新しいゲームをプレイしたい。現在よりも未来。未来を見つめねば！

右手に拳を作り、決心した。倅は仕事を断ることをやめた。

倅の表情がくるくると変わる。

「どうした、まずいのか？」

「いいえ、とっても美味しいんです！」

倅の笑顔を見て、社長はほっとして食事を始めた。

倅がどうして恋に走らず、ゲームばかりに夢中な人生を歩んでいるのか気になった。

「そつえば、お前の好きな男性はどんなタイプなんだ？」

「私ですか？」

恥らいながら倅は答えた。

「色々ですけど。好きなタイプはゲームキャラですね」

「ゲームキャラ？」

「仕草やセリフとか、色気のあるキャラなんて最高ですね！ そんなキャラに出会ってしまったら悶え死にます。他にはちょっと抜けてるキャラとか、母性本能をくすぐる弟系キャラとか！ くうー！ 言葉だけでは伝えきれない！」

目をキラキラと輝かせ、倅が不思議なハイテンションでゲームキャラについて熱く語りだした。饒舌スイッチが入った倅の口は止まらなかった。

倅に圧倒された社長は、ただその姿を呆然と眺めていた。

倅は好きな話を満足するまで喋りきり、清々しい顔をしていた。

コースも終了し、全て食べ終えたところでお開きとなった。

中盤は打ち合わせというより、倅の熱弁大会に近かった。その後は、たわいもないプライベートな話の情報交換の場となった。

頼んだタクシーが二台到着する頃、社長はレストランの会計を済ませる。倅は店を出たところで社長に向き直る。

「今日はご馳走さまでした」

「ほら、タクシー代だ」

財布から出されたお札を、倅は受け取らずに拒否した。どうして躊躇いなくそれをぼんぼん出せるのだろうか。

「いいですよ。お金がもったいないです」

「何を言ってるんだ、タクシー代くらい出してやる。俺が呼び出したんだから気にするな」

「だけど、このお金があつたら……、ゲームが一つ買えちゃいます。それでは、お休みなさい」

「ちょっと待て！」

歩いて帰ろうとした倅を引きとめた。歩いて帰るにもここから駅まで三十分近く掛かる。バスを待つとしてもこの時間では本数が殆どない。

「今日の所はタクシーで帰れ。金も気にするな。社長命令だ」

「わ、分かりましたあ」

倅がタクシーに乗り込むまで、社長は睨み付けていた。
今まで付き合ってきた女性は奢られるのは当然といった女ばかり
だったので、拍子抜けしていた。

「変な奴」

社長もタクシーに乗り込み、帰宅した。

第五話 打ち合わせ（後書き）

恋愛までなかなか辿り着けない＞＜

第六話

ある日の夕方、課長が倅を手招きした。

「峯島君、ちょっと」

課長が『君』付で呼ぶ時は、大体ろくなことがない。

倅は机に手を掛け、重たい体を起こして課長の席へと進んだ。

「何でしょうか」

課長は立ち上がり、咳払いを一つした。

「峯島、今日はゲームの発売日か？」

「いいえ？」

「では、残業を頼まれてくれないか？」

「残業、ですか？」

倅の顔には明らかに「残業よりもゲームがしたい」と書かれていた。課長は一瞬たじろぐものの、気を取り直して頷いた。

「うむ。今日は二人インフルエンザで休んでいるだろ。それでだな、峯島には悪いんだが残業を頼みたくな。分かっていると思うが明日中に仕上げないと間に合わない仕事が残ってしまってるんだよ。残業して少しは稼ぎたいって言ってたじゃないか。もちろん他の皆にも手伝ってもらうから」

「……わかりました」

課長はほっとしてどさりと椅子に身を預け、額から流れる汗を八

ンカチで一拭きした。

倅は集中力を最大限に活かし、仕事の追い込みに入る。皆で少しだけ残業すれば二人分の仕事なら簡単に補える。

集中力を保たせたいのに、内線電話が鳴った。倅は画面から目を離さずに受話器を掴んだ。

「はい、経理課です」

『峯島か？』

この低く苛ついた声の主が、誰だかすぐに理解して眉間を押さえた。

「なんです、こんな時間に」

『携帯に出ないからだろうが』

一番下の引き出しを開けて鞆を見ると、携帯電話が着信を知らせる点滅を続けていた。引き出しを静かに閉め、課長の席に視線を向ける。

課長はハンカチを握りしめた手を小刻みに震わせながら倅の方を見ていた。課長は意を決して立ち上がろうとしていた。

「残業中に取りれますか！」

『まだ終わらないのか？』

時計を見るとまだ十九時だった。残る仕事は最終チェックを済ませればほぼ終わりだった。

課長は立ち上がり「あらかた片付いたなら無理せず帰っていいぞ。」

お疲れ様」と声を掛け始めていた。

その声で、静寂な職場が賑やかになる。

「えーと……」

『飯、食べに行くぞ。帰る準備して地下の駐車場に來い。分かったな』

電話を叩き切られて、受話器を思わず耳から離した。全く乱暴なんだから。

帰り支度をしているところに、同僚の黒井晃あきひから声を掛けられる。

「峯島さん、これネットで見つけた面白そうなゲームのリスト」

「いつもありがとね」

黒井はゲーム仲間の一人だった。

倅の家にはパソコンが無い為、黒井からネットで情報や攻略方法をプリントしてもらっていた。

「それとき、あいつんちの奥さん、木綿子ゆづこさんが今夜夕飯ごちそうしてくれるって。その後みんなでPSPやるんだけど、峯島さんも来るよね？」

木綿子さんは元同僚だった。社内恋愛の末、寿退職をした。倅のゲーム仲間の一人でもあった。

黒井が指差した方向に木綿子さんの旦那が立っていた。

倅の顔が一瞬綻んだが、ぐっと堪えた。

「ごめんね、今日は予定があるから行けないや。今度また誘ってね

！」

悔しそうな顔をして倅は鞆を持って退社した。

黒井はそれを他の二人に報告した。

「えっ、珍しい。誘うと必ず来るのに」

「最近さ、峯島さんってオシャレに目覚めた感じするよな。それってやっぱり男でも出来たんじゃないのか？」

「ゲームにしか興味が無い感じだったのに？」

二人は倅の話題で盛り上がる。

顎に人差し指を曲げて添え、一人が口を開いた。

「いや、違うな。あれは好きな男が出来たんじゃないか？」

「えー、相手は誰だよ」

「俺は彼女が居るだろ、お前は妻帯者だし。消去法で行くと、黒井あたりか？」

「えっ、俺！？」

黒井は鳩に豆鉄砲を食らった顔をしていた。

もう一人の同僚も衝撃を受けていた。

「まさかー。……でも、ありえるな。ゲームでも意気投合できる
独身男性といったら黒井ぐらいだろ」

二人は頷いていた。

はじめはありえないと否定していた黒井は、その言葉に半信半疑
になってしまった。心当たりがあるといえばある。ゲーム繋がりと

はいえ、倅と一番会話をしているのは黒井だった。

——さっき悔しそうな顔をしていたのは、俺とゲームができないからだったのか……？

まさか、な。

黒井は頭を掻きながら呟いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9110y/>

恋人代行

2011年12月2日17時58分発行